前島密没後100年記念

鴻爪痕展

こう そう こん

HISOKA MAEJIMA

雪泥に印せる鴻の爪痕の、

はじめに

明治維新により、徳川幕府が倒れ、新しい時代の幕が開いた。そうした中で、冷静にこの事態を予期し、この国のあるべき姿を描いていた人物がいた。その人物とは、日本文明の一大恩人といわれる「前島密」である。

前島密は、天保6年1月7日（新暦 1835年2月4日）、越後国頸城郡下池部村（現在の新潟県上越市）の旧家に二男として生まれた。生まれた時の名は、上野房五郎。その名は時の流れの中で、巻退蔵、前島来助（輔）、前島密と変わっていく。

米国から黒船が来航し、日本国中が騒然となる中、最新鋭の軍艦と軍隊を実見し、国力の差を肌で感じた房五郎は、医学の道を棄て、志士となる道を選んだ。日本を守るためには西洋に対抗しうる近代国家を建設しなければならない。そのためには西洋の知識や技術を身に付けなければならない。そこで名を巻退蔵と改め、学ぶべき師を求めて日本中を旅したのである。日本中の陸路を走破し、箱館丸では日本中の港を巡る航海を行った。

幕臣前島家を継ぎ、前島来助となってからは、開国に伴う外国との実務的な接点である港湾実務を習得し、維新後は静岡藩士前島密として地域の産業振興に尽力している。明治政府に官吏として招聘されると、改正掛を経て、その知識、経歴から租税権正兼駅逓権正に任命された。

前島密は日本の近代化にとって最も重要なものは「情報」であると、だれよりも早く認識していた。そこで、自らの強い意志で、通信・交通インフラをいち早く構築していったのである。

本展では、日本文明の一大恩人と称えられた所以を、前島密の人生や明治期に残した功績を紹介するだけでなく、例えば密が郵便制度を構築していく過程やその時の想いを、当時の資料を用いるなどして、できるだけ具体的、かつ詳細に明らかにしたつもりである。

本展のタイトル「鴻爪痕」は、前島密の没後一年を経た大正9年4月に、前島家から発行され、一周忌の記念として関係諸氏に贈呈された前島密の伝記『鴻爪痕』から付けたものである。同書の中で、前島密は「余が自ら鴻爪と号せるは、雪泥に印せる鴻の爪痕の、争でか久しく存すべきと観念せるに依るなり。」と述べている。その意味するところは、「雪解けのぬかるみの泥に残された渡り鳥の爪の痕は跡形もなく消え去ってしまうが、人の業績も同じように風化し消えていくものだ」というものであり、自分の功績を誇るようなことは一切しなかった。

そのため本展は、鴻爪子前島密の意思を尊重し、歴史の奔流の中で自らの意思を貫いて歩んだ一青年の足跡を辿る旅としたい。

郵政博物館館長
井上卓朗

争（いか）で久しく存すべき

前島 密

HISOKA MAEJIMA

鴻爪痕（こうそうこん）

「鴻爪」は密の号で、「鴻爪痕」は前島家の依頼を受け、密の友人であった市島謙吉が、密の草稿をもとに編集した伝記です。前島の生誕から始まり駅逓頭在任中の明治9(1876)年までを述べた未完成の原稿ですが、その軌跡を知るうえで貴重な資料です。

《『鴻爪痕』》前島家発行／大正9(1920)年

Ⅰ 男子いやしくも志を立つ

―幼少年から青年時代―

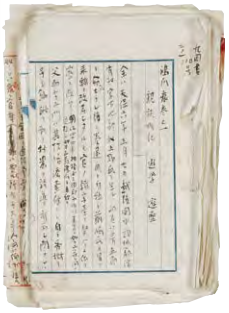
天保6年(1835)正月7日	0才	越後国頸城郡津有村大字下池部村(現在の新潟県上越市)で生まれる。父は上野助右衛門(8月11日病没)、母は高田藩士伊藤源之丞の妹てい(貞)。上野家の二男として生まれ、幼名を房五郎といった。
同13年(1842)	7才	6月、母と越後国糸魚川へ移る。糸魚川藩の藩医である叔父の相沢文仲に養われ、医学を志す。
弘化2年(1845)	10才	母と別れ、3月高田に遊学、藩の儒学者倉石典太(侗窩)の塾で学ぶ。
同4年(1847)	12才	9月、オランダ医学を学ぶため江戸に出る。
嘉永6年(1853)	18才	ペリー提督が軍艦4隻で浦賀港に来航。接見役井戸石見守の従者として浦賀港に赴く。
安政元年(1854)	19才	国防考察のため、港湾一巡の旅に出る。北陸道、山陰道を経て船で豊前小倉に渡る。九州西海岸を経て長崎に至り、肥後、日向を経て四国に渡る。伊予、讃岐を経て紀伊に渡り、伊勢から船で三河に渡る。東海道を東上して伊豆下田に至り、船で江戸に帰る。
同2年(1855)	20才	旗本の設楽弾正の屋敷に移り、設楽の兄岩瀬忠震に接し英語を学ぶ必要性を感じる。幕府の砲術家下曽根金三郎に西洋砲術を学び、設楽の臣中条某に数学を学ぶ。
同3年(1856)	21才	磐城平(福島県)藩士槙徳之進に長沼流の兵法を学ぶ。
同4年(1857)	22才	観光丸の運用長竹内卯吉郎に機関学を学ぶ。竹内の援助で軍艦教授所の生徒となり、見習生として観光丸に乗船する。
同5年(1858)	23才	巻退蔵と改名、東国海岸を経て、函館に赴く。諸術調所の武田斐三郎に航海術を学ぶ。
同6年(1859)	24才	函館丸に乗り組み約7か月の航海実習を行う。日本を周回し測量を行う。
万延元年(1860)	25才	函館奉行の命により函館丸測量役となり、約3か月の航海を行った後、江戸に帰る。
文久2年(1862)	27才	長崎に滞在しアメリカ人宣教師ウィリアムズやフルベッキ等から英語、数学等を学ぶ。
同3年(1863)	28才	何礼之に従い江戸に出て洋行を企てるが果たせずに、長崎に帰る。
元治元年(1864)	29才	長崎にて苦学生のために私塾培社を開く。
慶応元年(1865)	30才	・鹿児島藩(鹿児島県)の招きにより、鹿児島開成学校で英語を教える。(薩摩藩士の待遇) ・兄又右衛門死去の知らせにより郷里に帰る。

◆上越での日々

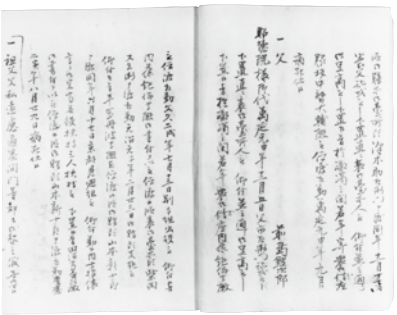
前島密は、天保6(1835)年正月7日、越後国頸城郡下池部村(現在の新潟県上越市)の旧家に、父・上野助右衛門、母・てい(貞)の二男として誕生しました。幼名は房五郎。父・助右衛門がこの年の8月11日に病没したため、密が4歳の時、母ていと共に上野家を出て高田に別居。ていは、裁縫などで生計をたてながら、錦絵や往来物により幼い密を教育しました。

7歳の春に糸魚川に移住、医者の相沢文仲に養われ医学を志しました。

その後高田の有名な学者倉石典太の私塾に通うため、10歳の冬に母から離れ、高田の伯父伊藤源之丞の家に入りましたが、後に下池部の生家に移り7km離れた道のりを往復して勉学に励みました。



《鴻爪痕草稿　巻之一》
鴻爪痕の草稿のうち、誕生時のことを記した部分。



《前島密翁由緒書親類書》

《てい肖像画》

◇母の教え

母ていは、もとは高田藩(榊原家15万石)の武士(伊藤源之丞)目付役(200石)の妹で、旧家の上野家に後妻として入りました。密が生まれて7か月後に夫助右衛門が病没し、その後ていは幼い密を連れて上野家を離れ、実家のある高田に別居します。母子二人での貧しい生活の中、ていは、錦絵や往来物によって幼少期の密を教育しました。

ていは、その後も密を厳しいながらも愛情をもって教育していきます。ここでは母ていがどのように密を教え導いていたかがわかる「母の言葉」を紹介します。

夜には幼弱にして文を解し、書を能くし、人の賞詞受くる者あり。然れども成長の後は多く凡庸の人と為りて、嗤(わら)いを招くもの多し、汝が今日の事、之に類似せずや。

糸魚川藩医であった叔父相沢文仲のもとに移住し、医学を志していたころ、ある俳句の会で密が詠んだ「夕鴉しょんぼりとまる冬木立」の句が称賛され賞品ももらいました。ところがていは、「幼い頃人にほめられ自分の才能におぼれてしまい大成しなかった人が多い。あなたもこのようなことになるのではないかと思うと、とても心配だ」と密を諫めました。密はこの母の言葉を一生涯の訓戒としました。

一旦方針を定めて前進せんとす。何ぞその歩を躊躇せんや。

医者を志していた12歳の密が、江戸に遊学をしたいという気持ちを母に打ち明けた時の言葉です。ていは一旦方針を決めたら頑張って前進しなさいとの言葉で密を励ましました。

男子いやしくも志を立つ。死は素より恐るるにたらず。ただ注意すべきは長旅の健康なり。

密が18歳の頃、黒船が来航しました。この衝撃は密の人生を変え、国防の志を強く抱かせることになりました。砲台や港湾を見てまわる全国一巡の旅に出る際に、別れを告げに家に立ち寄った密にていは、「男子が志を立てて一旦志士となったからには、死を恐れてはいけない。しかし長旅の健康には十分気をつけなさい」と言葉をかけました。

◆医師を志し、12歳で江戸へ

母と二人の貧しい生活の中、医者を目指して学問を続けていた密は、最新の医学を学ぶために12歳で江戸に旅立ちます。

江戸での密の生活は厳しいものでした。医者の家の手伝いをしたりしながら学問に励んだほか、政治・兵法・西洋事情などの写本の仕事をして生活の糧を補いました。しかし、この写本から得た知識が、後の彼の人生において大いに役立つことになりました。

《前島密一代記》江戸への旅立ち 梶鮎太画／昭和60(1985)年

◇お酒好きの密？

昭和30(1955)年に改訂再版された『鴻爪痕』(前島会(現・公益財団法人通信文化協会)発行)に収録された、前島家養女の小山まつ子氏の寄稿文「思ひ出のまゝ」には、密が昔を思い起こして語った話が載せられています。

「自分は、まだ世に出ぬ時は、お寺に厄介になった事もある。足軽の家に同居したこともある。其家の赤坊を背負ったり、お米を洗ったり、水を汲んだり、八百屋へ沢庵を買いに行ったりもした。

筆耕で自活するようになってからは、小土瓶に少量の御酒を入れて、行燈の取手から紐でつり下げ、よい加減にあたたまる頃筆を措き、手製の大根の大阪漬を肴に、わずかに一日の労を慰めた事もある」

若き日の生活ぶり、そして等身大の密がかいま見える一節です。

◆日本の夜明け、黒船の来航

嘉永6年6月3日(1853年7月8日)、前島密18歳の頃、アメリカ合衆国東インド艦隊司令長官 ペリー提督が、最新鋭の2隻の蒸気船サスケハナ号とミシシッピー号、他2隻の帆船を率いて浦賀沖に来航し、日本を大きく揺るがせました。この衝撃は、青年密の人生をも変えます。日本の将来に危機感を持った青年密は、医学の道をやめ、国防考察のために全国の海岸線を巡り、砲台や港湾を見分・把握する旅に出ました。

◆知識への渇望

衝動的な旅では十分な収穫を得ることができなかった密は、まずは学問により知識を得ることの重要さを痛感します。

そこで、下曽根金三郎に兵法、砲術など軍事に関する学問を学びます。また、軍艦教授所の竹内卯吉郎からは機関学を学び、研修生として観光丸に乗せてもらいました。

このとき、貿易を行う商船に関心が高まり、諸術調所で商業業務を教授している武田斐三郎に学ぼうと箱館に向かいます。この頃名を巻退蔵と改めています。箱館では入塾後、帆船箱館丸に乗り組み、2年間に2回の日本周回を経験しました。

その後、長崎に赴いた密は、アメリカ人宣教師のウィリアムズやフルベッキに英語や数学を学びました。

江戸から長崎までの道中絵巻(小倉付近)／江戸時代

◆前島密の足跡

箱館（北海道）

23歳、巻退蔵と改名。箱館に赴き、24歳の春に諸術調所に入塾、武田斐三郎に航海術を学ぶ。箱館丸で2年間に2回、日本周回の航海実習を経験。その後回船業者や船員の実務を学び、樺太南岸まで航行。

下関（山口県）小倉（福岡県）四　国

ペリー来航のようすを目の当たりにし、国防考察のため、北陸道山陰道を経て、船で豊前小倉に渡る。その後、九州西海岸を経て長崎に至り、肥後、日向を経て四国に渡る。
その後、紀伊（和歌山県）、伊勢（三重県）から東海道へ出て江戸にもどる。（19歳）

越後（新潟県）

上越市下池部村の旧家に生まれる。生後まもなく父を亡くす。幼少期、糸魚川や高田で学び、医学を志していた。

江戸（東京都）

医師を志し12歳で江戸へ。
22歳の時に観光丸の運用長竹内卯吉郎に機関学を学ぶ。軍艦教授所の生徒となり実習生として観光丸に乗船。
31歳の時に幕臣前島錠次郎の養子となり、名を来助と改める。
34歳の時に明治政府に出仕。

長　崎

アメリカ人宣教師ウィリアムズやフルベッキ、何礼之らに英語や数学を習う。（27歳）

芦名（神奈川県）

晩年を神奈川県三浦郡西浦村（現在の横須賀市芦名）の別邸・如々山荘で隠遁する。大正8（1919）年、84歳で没する。

神戸（兵庫県）

兵庫開港に伴い、兵庫奉行の手付出役として港湾事務に当たる。後に兵庫奉行支配定役となる。（32歳）

駿河（静岡県）

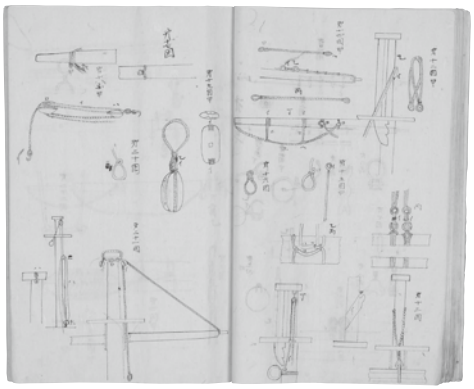
大政奉還後、静岡に移った徳川家の公用人として駿河へ。遠州中泉奉行となり、後に静岡藩開業方物産掛となる。このころ密と改名。（33～34歳）

薩摩（鹿児島県）

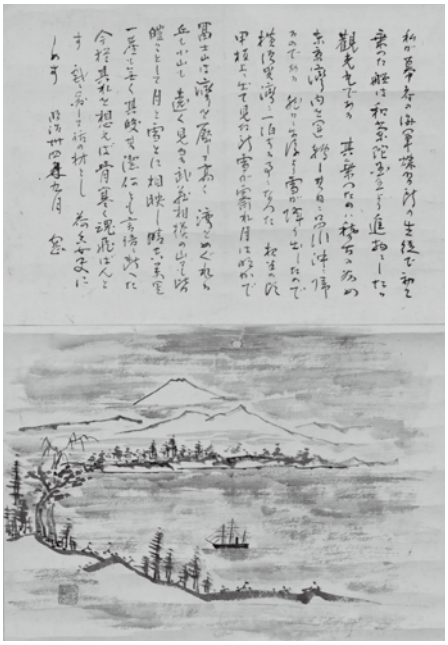
30歳の時、薩摩藩から開成学校の英語教師として招かれ、薩摩藩士の待遇を受ける。

◇4つの名前

前島密の生まれたときの名前は房五郎。
武田斐三郎に学ぼうと箱館に向かった23歳の頃に巻退蔵と名を改めました。
前島家を継承し前島来助（輔）と名乗り、その後遠州中泉奉行となった頃に前島密と改名しました。



《梅の朽枝》／安政期
安政4（1857）年、前島密が軍艦教授所に在学中の直筆ノート



観光丸懐旧の図／前島密 画・賛／明治34（1901）年
安政4（1857）年に幕府の軍艦教授所の生徒となり観光丸に乗船した時のことを後の時代に懐かしみ描いたもの。

―幕臣へ―

前島密は、長崎奉行所の英語稽古所の学頭である何礼之が別に開いた家塾の塾長となり、貧しい中で英語を学ぶ若者が安い費用で生活できる「培社（ばいしゃ）」という学舎を作りました。

このとき、薩摩藩から鹿児島の開成学校の英語教師として招かれ、手厚い待遇を受けましたが、藩内では開国派の密とは考えを異とする尊王倒幕論が高まり、兄死去の知らせを機に鹿児島を去りました。

江戸へ戻った密は、慶応2（1866）年、前島家の跡を継いで、幕臣となり、前島来助（輔）と名乗ることになりました。この頃幕臣清水與一郎の娘奈可（仲子）と結婚、この年の末に「漢字御廃止之儀」を建議しています。

幕臣となった密は、その学識が認められ開成所（東京大学の前身）の教授となります。が、兵庫の開港を知り、外交を理解するためには外国船の入る港湾の税関業務を知る必要があると考え、兵庫奉行所を希望して実務の担当者となりました。

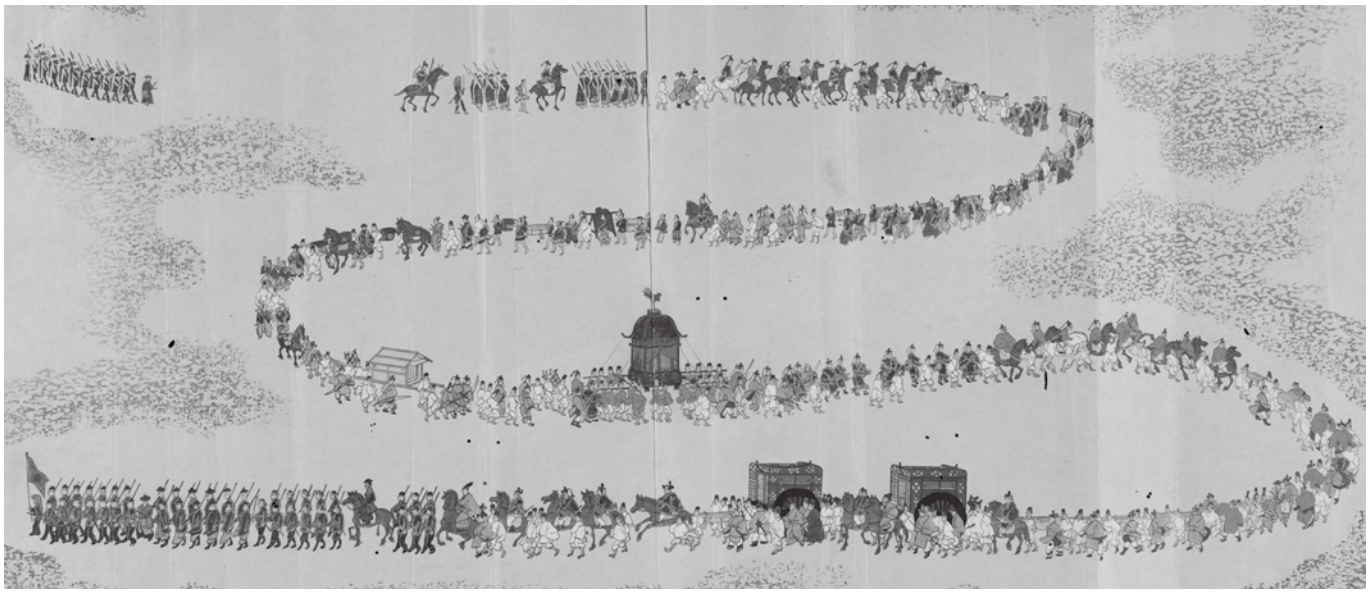
《奈可夫人の肖像写真》

◆新しい日本の夜明け

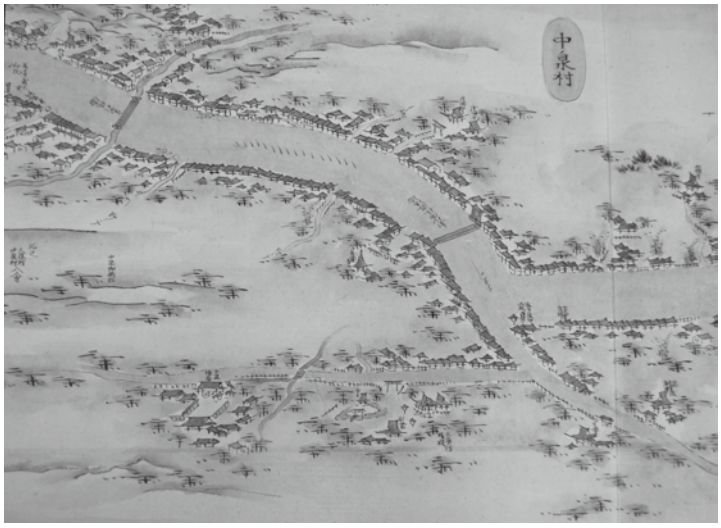
慶応3（1867）年将軍慶喜が朝廷に大政奉還を行いますが、前島は、大政を奉還するだけではなく幕府の所有している領地の3分の2を削減し還納すべきと重刑を覚悟で「領地削減之儀」を建言しました。

慶応4（1868）年、大久保利通が大坂遷都を建言したことを知り、新国家の内政や外交を行うためには、江戸が首都にふさわしいと「江戸遷都論」を唱え、建言書を大久保に送りました。

維新後、密は、徳川家が移った駿河（静岡）藩の留守居役に勝海舟から抜擢され、公用人、遠州中泉奉行を歴任、奉行職廃止後は藩内の開業方物産掛となりました。



《明治天皇御東行御供奉御行列之図》／新井春岱（写）



《東海道分間延絵図控》部分
中泉村付近
道中奉行所／文化3（1806）年

Ⅱ 新しい国づくり

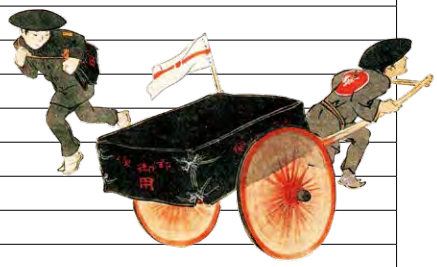
―明治政府への出仕―

明治新政府は近代的な国家づくりのために、有能な人材を求めていましました。

静岡藩の開業方物産掛であった前島密は、明治政府から出仕を要請され、明治2(1869)年12月28日に民部大蔵省九等出仕改正掛勤務となりました。

民部大蔵卿は伊達宗城、大輔は大隈重信、少輔は伊藤博文。改正掛は、旧来の封建的な制度を改革し、近代国家を建設するための企画立案をする、いわば明治政府のシンクタンクで、メンバーは杉浦譲など旧幕時代に外国出張を経験した逸材たちで、改正掛長は渋沢栄一でした。

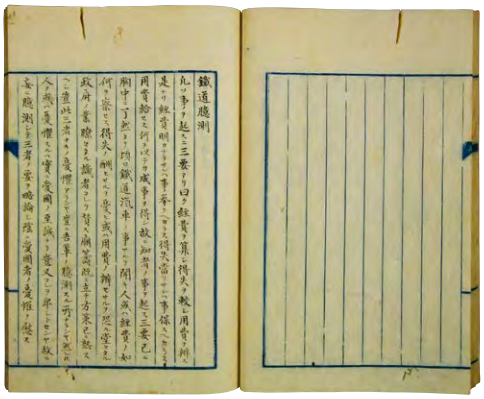
慶応2年(1866)	31才	・江戸に出て幕臣前島錠次郎の養子となり、名を来助(輔)と改める。 ・「漢字御廃止の議」を将軍徳川慶喜に提出。 ・幕臣清水與一郎の娘奈可(仲子)と結婚する。 ・幕府開成所の反訳筆記方となる。
同3年(1867)	32才	・開成所数学教授となる。 ・兵庫開港に伴い兵庫奉行の手付出役として神戸に行き港の事務に当たる。後に兵庫奉行支配定役となる。 ・大政奉還を知り「領地削減の議」を将軍徳川慶喜に提出する。
慶応4年・明治元年(1868)	33才	・大阪まで出向き大久保利通に江戸遷都を献言する。 ・大政奉還後、駿河藩(静岡県)留守居添役、同本役になり、間もなく同藩公用人となる。
明治2年(1869)	34才	・駿河藩浜松添奉行となり同藩遠州中泉奉行となる。このころ密と改名。後に静岡藩開業方物産掛となる。 ・この年の暮れに明治政府に召され、民部省九等出仕となり、改正掛に出仕する。
同3年(1870)	35才	・「鉄道臆測」を作成する。 ・4月租税権正(従七位)となり、5月駅制改革のため駅逓権正を兼任。6月新式郵便制度を立案。 ・ネルソン・レイの鉄道起債破棄と新紙幣製造のため、イギリスに行く。
同4年(1871)	36才	・3月1日(新暦4月20日)郵便の創業。 ・8月11日イギリスから帰国、17日駅逓頭となる。
同8年(1875)	40才	郵便為替、郵便貯金の取扱いを開始する。
同9年(1876)	41才	楽善会に入会し訓盲院設立に尽力する。(12年落成)
同10年(1877)	42才	・西南戦争のため大久保内務卿に代わって内務省の省務をみる。 ・第1回内国勧業博覧会審査官長となる。 ・万国郵便連合に加盟。
同14年(1881)	46才	駅逓総官を辞し野に下る。大隈重信などと行動を共にし、立憲改進党結成に尽力する。
同20年(1887)	52才	東京専門学校(早稲田大学の前身)校長となる。
同21年(1888)	53才	逓信大臣榎本武揚に請われ、逓信次官となる。
同23年(1890)	55才	電話の交換業務を開始。
同24年(1891)	56才	逓信次官を辞する。
同35年(1902)	67才	勲功により男爵を贈られ、華族に列せられる。
同37年(1904)	69才	貴族院議員となる。
同38年(1905)	70才	日本海員掖済会理事長となる。
同44年(1911)	76才	神奈川県西浦村(現在の横須賀市芦名)に別邸・如々山荘を設け隠退する。
大正5年(1916)	81才	逓信省構内に寿像が建設され、除幕式に出席。
同6年(1917)	82才	夫人没す。享年69才。
同8年(1919)	84才	如々山荘にて4月27日没す。



◆鉄道臆測

改正掛において、前島密は大隈重信から命じられ、京浜間鉄道建設のための概算書「鉄道臆測」を数日でまとめあげます。これは、土木・建設費だけでなく、運行開始後の経営収支の予測まで行った調書で、鉄道建設開始を助けました。

4月には租税権正(ごんのかみ)となり、租税の金納化など税法改正に取り組みました。



1

1《鉄道臆測》明治3(1870)年／早稲田大学図書館蔵

2《東京高輪鉄道蒸気車走行之全図》歌川国輝(二代)／明治4(1871)年
明治5年5月7日に品川～横浜間に初めて鉄道が仮開通し、それと同時に汽車で郵便物を輸送するようになった。明治5年10月14日、新橋・横浜間約29㎞が正式に開業した。この汽車は、明治4年に輸入されたイギリス製の蒸気機関車と思われる。

3《東京汐留鉄道館蒸汽車待合之図》歌川広重(三代)／明治6(1873)年

2

3

―郵便の創業―

◆郵便誕生へ

明治3（1870）年5月、前島密は租税権正の業務とともに駅逓司の事実上の長である駅逓権正の兼務を命じられました。

駅逓司は、水陸運輸駅路を統括する役所で通信の管理も担っていましたが、当時は旧幕府の道中奉行所（五街道を管理していた役所）とあまり変わりありませんでした。

全国を旅した体験や静岡藩中泉奉行の経験により通信の不便さを実感し、またアメリカの歴史書「連邦史略」やアメリカ人宣教師ウィリアムズから通信の重要性を学んでいた密は、駅制の改革と、全国的な通信網の整備を検討していました。

ある日、公用通信のために政府が飛脚に支払う賃銭の回議文書を見た密は、その高額な金額を資金とすれば、官営郵便の創設が可能と考えました。

密はこの事業の具体案を20日間でまとめあげ、明治3（1870）年6月2日に「郵便創業の建議」を行いました。

しかし、この郵便創業の立案直後、密は本務である租税権正の案件により、兼任していた駅逓権正を解かれ急遽イギリスに出張する事になり、郵便創業に立ち会うことはできませんでした。

《正院本省郵便決議簿　表紙（右）、郵便創業の起案文書（左）》

郵便創業時の起案文書を明治7年頃まとめたもので、明治3年と明治4年の2冊が残されている。

《正院本省郵便決議簿にある最初の切手図案》明治3（1870）年

デザインは周囲を梅の花で囲ったもので偽造されやすいことから採用されなかった。

《渡欧時代の前島密》

◇イギリスへの出張

郵便創業の立案直後、前島密は、ネルソン・レイの鉄道起債破棄等のため、アメリカ経由でイギリスに渡りました。

産業革命の時代である当時のイギリスでは、交通や通信網の発達が目覚ましく、郵便馬車は全国を網羅、主要工業都市間は鉄道で結ばれていました。

イギリスは、1840年にローランド・ヒルの改革により、切手による料金前納と均一料金制の近代郵便制度を世界で最初に実施していました。

また、イギリスの郵便局では、郵便為替、郵便貯金も取扱い、郵便保険も行っていました。密は、公務の合間に郵便局の職員に直接話を聞いたり、実際に利用するなどして、郵便局の業務を学びました。

◆新式郵便制度

前島密の後任、杉浦譲は、前島密の案の手順に従いながらも、現実的な改善を加え、東海道の宿駅への新式郵便制度についての説明、用品の準備、切手の製造など郵便開業の準備を進めました。

明治4（1871）年1月、郵便創業の太政官布告が発せられ、3月1日（新暦 4月20日）から東京、京都、大阪と東海道の各宿駅で郵便の取扱いが開始されました。

《竜文切手》

切手は、四十八文、百文、二百文、五百文の4種が発行されました。

《創業時の制服》
明治4年

《創業時の制服》
明治5年

創業時の郵便は…

- 切手による前納
- ポスト（書状集箱）を利用
- 料金はあて地別により決められる。
- 東京・大阪・京都に郵便役所、3都市を結ぶ東海道の宿駅に62の郵便取扱所を設置。

《浅草並木人力車の賑ひ》部分 昇斎一景／明治4（1871）年

目印として「郵便」と書かれた旗が立っているようすが描かれている。

《書状集箱》
（都市用）明治4（1871）年

《創業時の太政官布告》各地時間賃銭表　書状出す人の心得（大阪版）
駅逓司郵便役所／明治4（1871）年

三都市や街道の宿駅には書状集め箱と呼ばれる郵便ポストが設置され、郵便の利用方法などが書かれた「書状を出す人の心得」「各地時間賃銭表」が掲示された。

各地にあてた郵便は、宛先ごとの袋に入れ行李に納めて運送員が肩に担いで送ることになっていました。運送員は3貫目（11.25kg）の行季を担ぎ、1時（2時間）に5里（約20km）の速度で宿場間を継送り（リレー式）で運び、東京・大阪間を78時間で結びました。

郵便料金は、5匁（18.7グラム）までの書状一通が東京から藤沢まで100文、大阪まで1貫500文といった具合にあて地別に決められていました。

宿駅では、伝馬所の一隅を郵便取扱所として改造し、元宿役人らが切手の売捌きや郵便の引受・差立などの実務に携わりました。

大阪郵便役所では、地域別の差立や配達区分など信書の取扱いに精通した定飛脚の手代を官員に雇って業務を行いました。

このように、創業時の日本の郵便制度は、切手による料金前納制とポストの利用以外は、これまでの宿駅の伝馬所や飛脚と同様の作業で行われていました。

◆郵便の全国実施

明治4(1871)年8月、イギリスから帰国した前島密は自ら希望して駅逓頭となり、通信・交通の近代化に取り組みました。

その年の12月5日には東京・長崎間の郵便線路が開通します。長崎までの開通を急いだのは、6月に大北電信会社の上海・長崎間海底電信線が完成して、海外との電信が可能となったためで、早急に東京までの通信を確保する必要があったからでした。

同日、郵便規則が施行され、料金が距離制となり、新聞等の取扱いも開始されました。

そして明治5年6月、郵便制度を全国に実施する太政官布告が発せられ、7月1日から、北海道の後志(しりべし)、胆振(いぶり)以北の地域を除いて郵便の取扱いが全国で実施となりました。この時、新たに706ヵ所の郵便取扱所が開設され、同年末の郵便取扱所数は1,100ヵ所を超えました。

◇創業時の郵便を支えた人々

創業時、郵便の急速な全国拡大を支えたのは、各地の郵便取扱人でした。その大半は、幕府時代から宿役人、本陣、名主(庄屋)などで中心的な役割を果たしていた人たちでした。彼らは、準官吏としての格式を与えられ、自宅を郵便取扱所として業務にあたりました。

◆全国均一料金制の導入

明治6(1873)年4月1日、郵便料金が距離制から全国均一制となりました。書状1通2匁(7.5グラム)までごとに、距離に関わらず二銭と定めました。但し、同一市内宛の料金は半額としました。

前島密は、均一料金制を導入するにあたり、5月1日から郵便事業を政府の専掌とし、飛脚など民間の信書逓送を禁止しました。

このように日本の郵便は、官営独占による均一料金制の施行によって、近代郵便としての条件をようやく整えることができました。

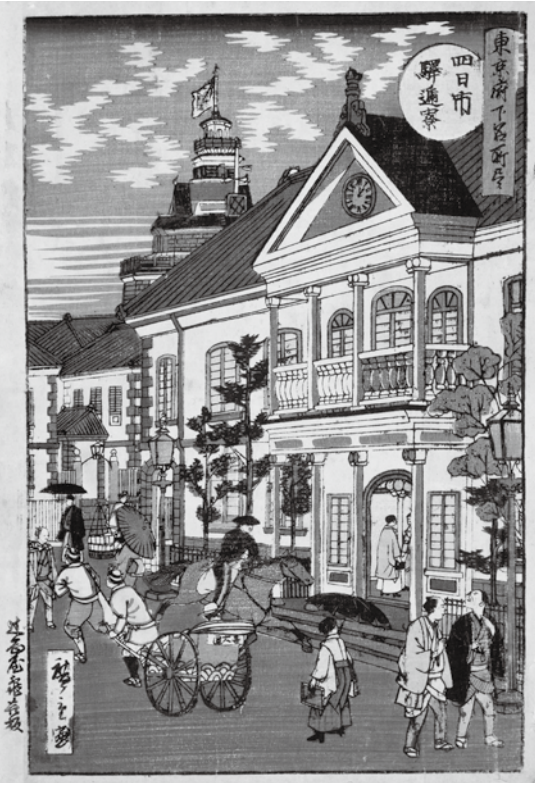
◇郵便創業時のあゆみ

明治4年　郵便の創業
　　東京・京都・大阪の東海道各宿駅で郵便の取扱いを開始
　　郵便をつかさどる駅逓司、
　　その下に郵便役所と郵便取扱所(現在の郵便局)を設置
　　最初の郵便切手を発行
明治5年　全国で郵便実施(北海道の一部をのぞく)
　　外国郵便の取扱いを開始(在日外国郵便局を経由)
明治6年　郵便料金の全国均一制を実施　郵便はがきの発行
　　郵便事業を政府専掌とし飛脚の営業を廃止
　　日米郵便交換条約を締結
明治8年　郵便役所、郵便取扱所が「郵便局」と改称
　　郵便為替の創業　郵便貯金の創業
明治10年　万国郵便連合に加盟
明治13年　在日外国郵便局がすべて閉鎖に
明治18年　往復はがきの発行
　　逓信省を創設(郵便、電信、灯台、管船の事務を所管)
明治20年　逓信省の記章を〒マークに制定

《創業時の駅逓司(寮)と郵便役所》

左：創業当時は魚会所跡の古い建物を使用していた。日本橋四日市(現在の日本橋郵便局の場所)に、明治7年4月30日に改築となった。

右：洋風木造二階建て、バルコニーが付き、破風の下には当時としては大変珍しい時計が取り付けられた建物は、文明開化期の建物として錦絵にもよく登場している。1階は、東京郵便役所(郵便局)となっており、日本郵便発祥の地として知られる。



《東京府下名所尽四日市駅逓寮》歌川広重(三代)／明治7(1874)年

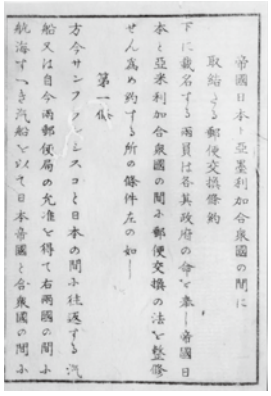
◆外国との郵便のはじまり

外国向け及び外国から来る郵便物の取扱いは、わが国に設置されていた外国の郵便局を利用して、明治5(1872)年に始まりました。

前島密はアメリカ人ブライアンを雇ってアメリカと交渉を重ね、明治8(1875)年に対等な立場で日米郵便交換条約を結び、正式に外国郵便が開始されました。

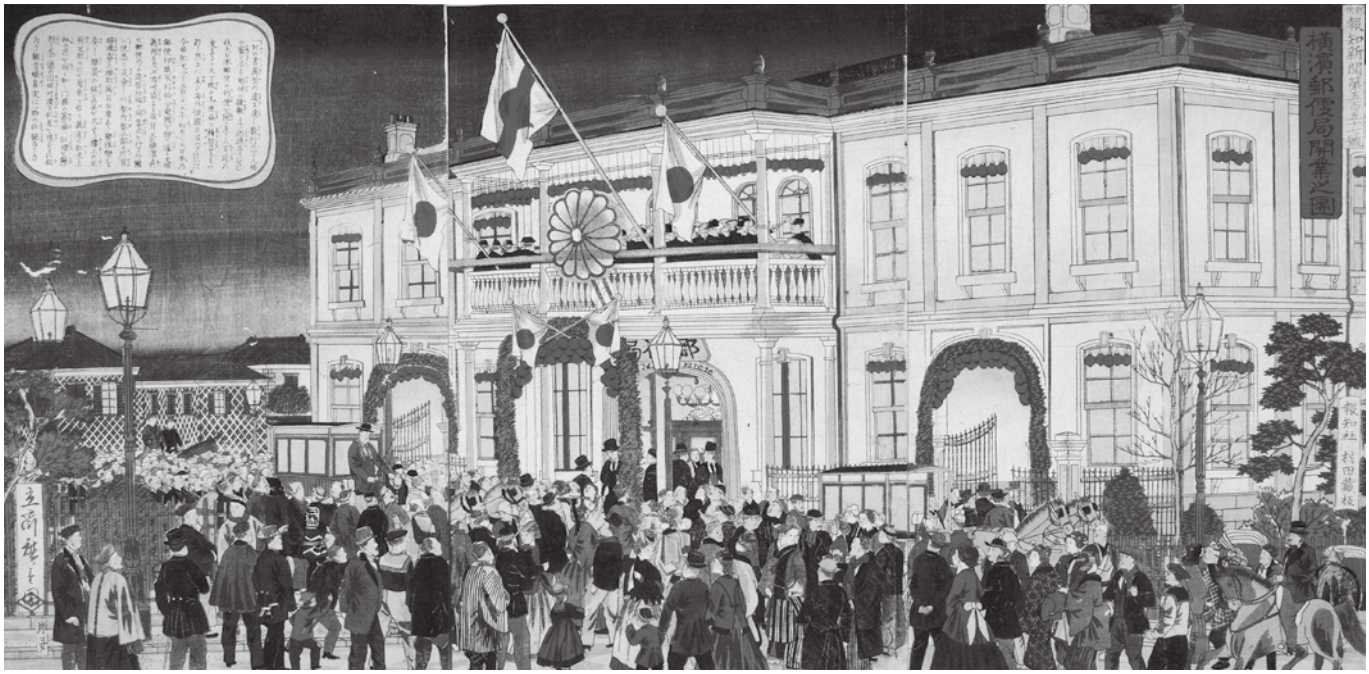
その後、明治10(1877)年には万国郵便連合(UPU)に加入し、世界各国と自由に郵便を交換することができるようになりました。

《サミュエル・ブライアン》



帝國日本ト亞墨利加合衆國ノ間ニ
取結ヒタル郵便交換條約
下ニ載名スル兩員ハ各其政府ノ命ヲ奉シ帝國日
本ト亞米利加合衆國ノ間ニ郵便交換ノ法ヲ整
ヘンタメ約スル所ノ條件左ノ如シ
第一條
方今サンフランシスコト日本ノ間ニ往返スル
汽船又ハ自今兩郵便局ノ允准ヲ得テ右兩國ノ
間ニ航海スヘキ汽船ヲ以テ日本帝國ト合衆國

《日米郵便交換条約書》



《横浜郵便局開業の図(報知新聞第557号)》歌川広重(三代)／明治8(1875)年
開業式は前年末に完成した横浜郵便局において外国の外交官を招待して行われた。

◆郵便為替と郵便貯金

密は、郵便制度の発案時にはすでに送金の重要性について認識していました。イギリス出張の折に郵便為替の状況を知った密は、帰国後検討を始め、明治5(1872)年には為替の規則や施行案を作成しましたが資金不足のために実現はできませんでした。明治7年になりようやく資金の都合がつき、明治8(1875)年1月2日、国内110の郵便局で郵便為替の取扱いが開始されました。

郵便貯金も為替と同じく英国出張の折に得た知識を生かして創設されたもので、明治8年5月2日に開始となりました。当初は東京市内18局と横浜市内1局で取扱いを開始しました。

◆簡易保険

密は、イギリスの郵便保険を参考に、貯金の創業のころにはすでに国営の生命保険及び養老年金事業を始めるための草案を準備していました。が、当時は時期尚早であると考えられていたため、すぐには実現しませんでした。簡易保険の取扱いは大正5(1916)年、郵便年金の取扱いは大正15(1926)年に開始となりました。

《郵便現業絵巻》第五図 東京郵便電信局の郵便為替貯金窓口ロビー 久保田米僊／明治26(1893)年

―密と文明開化―

《東京名所両国報知社図》
歌川広重(三代)／明治9(1876)年

◆新聞と郵便

前島密は、新聞の発達を助けるために、明治4年12月、新聞雑誌の低料送達の道を開き、その翌5年6月には、郵便取扱人の太田金右衛門を発行者として、『郵便報知新聞』(のちの報知新聞)を創刊しました。

また、明治6年7月には新聞原稿を無料で送ることができる制度を作りました。

◆郵便と新しい運送業

明治5(1872)年7月、全国の宿駅制度が廃止されました。密は、運送業の近代化を奨励、郵便輸送を条件に馬車や蒸気船などを使った新しい交通機関を保護育成しました。当初、定飛脚を中心とした飛脚業者は、郵便に料金競争を挑みましたが、密の説得により陸上の貨物輸送を業務とする陸運元会社(現在の日本通運株式会社)を設立、各種の郵便業務を請け負うことになりました。

明治5年に中山道郵便馬車会社が東京・高崎の輸送を開始、明治6年から京都大阪間郵便馬車会社が京都・大阪間の輸送を行ったほか、東海道では明治7年から陸運元会社が神奈川・小田原間の輸送を開始しました。明治10年には神奈川・京都間を馬車、人力車、脚夫、渡船を利用して、郵便は56時間で運ばれました。

船舶では、日本帝国郵便蒸気船会社が明治5年に東京・大阪間、函館・石巻間を輸送を開始、明治8年には三菱商会(後の郵便汽船三菱会社)、明治18年には日本郵船会社が東京・神戸間など主要航路の輸送を行いました。

鉄道については、明治5年5月の品川・横浜間の仮開業の頃から郵便の輸送を行いました。

新しい輸送機関は郵便輸送によって発展してきたといっても過言ではありません。

《東京両国通運会社蒸気往復盛栄真景之図》
野沢定吉／明治10(1877)年

◆訓盲院の創立

前島密は、明治9(1876)年に視覚障がい者の教育をめざす楽善会に入会しました。杉浦譲など同志の人たちとともに私金を出し合い、訓盲院(現在の筑波大学附属盲学校)の設立に力を尽くしました。

明治12年に完成した訓盲院は、その後文部省へ移管されましたが、密は長くその運営発展に尽くしました。

《前島密業績絵図》11訓盲院の創立
前田青邨監修・守屋多々志画

《東京名所之内 上野山内一覧之図 第1回観業博覧会》暁斎／明治10(1877)年

◆勧業博覧会の開催

静岡藩において開業方物産掛として産業振興に取り組んだ経験がある密は、産業振興に深く関心を持っていました。大久保利通は、勧業博覧会を内務省の所管とし、明治10(1877)年、第1回勧業博覧会を東京上野で開催、密を審査官長に命じました。

◆日本海員掖済会(えきさいかい)の創立

明治13(1880)年、密は海員の素質向上とその保護救済などを目的とする日本海員掖済会を発足させ、その発展に尽くしました。

《前島密業績絵図》13日本海員掖済会の創立
前田青邨監修・守屋多々志画

校長のガウン姿の前島密肖像写真

◆東京専門学校

明治15(1882)年、早稲田大学の前身、東京専門学校が創立されました。この学校は学問の独立を主張する大隈重信の発意で生まれたものですが、前島密は評議員としてその創業に参画しました。その後、明治20年に校長に就任し、財政の独立など経営上の困難な問題の解決にあたりました。また校長を退いたのちも、同校の発展のために尽くしました。

◆電話の開始

明治23(1890)年12月、東京・横浜市内とその相互間にはじめて電話の交換業務が開始されました。電話事業については、明治16年以来、官営にするか民営にするか議論されていました。前島密は明治21年に逓信大臣榎本武揚の要請で逓信次官に就任すると、官営に意見を統一し電話事業を開始しました。

交換業務開始時は加入者が東京179名、横浜45名で予定の300名に達していませんでしたが、その便利さが理解されるとその後は急速に発展していきました。密は、電話交換業務が順調に行われるようになったのを見届けて次官を辞職しました。

《ガワーベル電話機》
初期に使用された電話機。

《電象の姿図》掛幅／奥田芳彦画
密が、電気の持つ不思議な力を人格化して描かせたもの。

《東京豪商寿語六》歌川広重(三代)／明治7(1874)年
この寿語六は、文明開化期に発展した会社を取り上げ、東京の豪商ばかりを描いたものである。為替会社を振出しに、廻船会社・三菱組・馬車会社・陸運元会社・三井組・第五国立銀行などを経て、最後の第一国立銀行が上りとなるゲームである。右下の2番目には郵便会社と書かれた駅逓寮、中央の下から2番目には、建物の前を郵便外務員が駈けていく姿も描かれている。

前島密のめざした文明開化

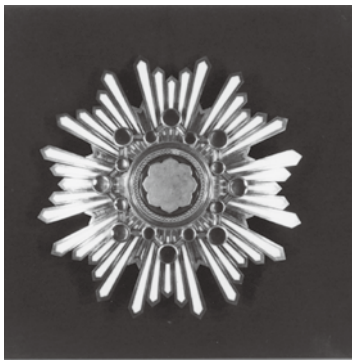
明治政府は、欧米の制度や文物を取り入れることで殖産興業や富国強兵を目指し、強引ともいうべき急激な西洋化によって国家の近代化を推し進めていきました。

前島密の考える文明開化は、単なる欧米の建物や生活様式など表面的な模倣ではなく、国民主権、民主主義の精神やその知識、思考の獲得にあると捉えていたと思われます。

それは、彼の構築した社会基盤が、誰もが公平に、自由平等に利用できることが原則になっていることや、訓盲院の設立、東京専門学校創立への参画、国字改良等、教育への熱心な活動にもよく表れているといえます。

Ⅲ 鴻の爪痕

―晩年の密―



1《勲二等瑞宝章》

2《銅像写真》

3《家族写真》

4《釣深致遠》伊藤博文／明治14(1881)年

5《晩年の前島密》

6《晩年の前島密夫妻》

1 UPU加盟25周年を迎えた明治35(1902)年、密は男爵を授けられ、明治37年には貴族院議員となる。明治39年勲二等瑞宝章を受けた。

2 大正4(1915)年、密が80歳の高齢に達したのを記念して祝寿会が開かれ、その席で銅像建設の声があがり、100名近い人々から寄附金が寄せられた。彫刻家新海竹太郎が銅像を製作し、台座は建築家伊東忠太が設計して、逓信省構内に建てられた。大正5年7月1日に盛大な除幕式が行われ、箕浦逓信大臣の祝辞、大隈重信首相、渋沢栄一の演説などがあって、密の功績をたたえた。この銅像は、現在前島記念館の前庭に設置されている。

5 明治43(1910)年75歳になった密は、ほとんどの職を辞し、若き日の思い出が残る九州各地を旅行した。その後、神奈川県芦名(横須賀市)に隠居所「如々山荘」を設け、終生ここで過ごした。

6 大正6(1917)年に仲子夫人が69才で死去、密は落胆しその後は体調はすぐれず、大正8(1919)年4月27日午前5時、84才の生涯を閉じた。夫妻の墓は、如々山荘に隣接する浄楽寺にある。

◇前島密の評価

『鴻爪痕』追懐録より(前島家発行、大正9(1920)年)

《大隈重信からの評価》

フオーセットの原理を見ても直に理解する、夫れを日本に応用する。尤も日本の状態は英国と違うから其儘持つて来る訳にはいかぬ、そこで応用をする。実際に之れを経営するに付て如何にすれば宜いかと云ふこと、所謂物を経営管理するの能力は前島君は余程優れて居つた。その意味は少し学問があれば直に理解する。所が理解して夫れを日本に如何に応用するかと云ふ学究的の人は少ない。所謂学理を実際に応用する、此点に前島君は優れた能力を有つて居る。

《渋沢栄一からの評価》

誠に明敏な御人である、さうして常識に富んだ御人である、それで考へが余り拘泥せぬ、或場合には十分融通の利く方で、唯一目散に一つ考へたならば馬車馬的に進むと云ふことでなくして、融通の利く御方である。それで意志が肇固でないかと云ふと、決してさうでない。方針を定めたことは其方針に向つて進んで行くと云ふことは必ず守る所のある御人と思ひます。誠に稀に見る所の役人とすれば良吏であるし、実業界に這入つたら立派に一会社、一銀行の首脳に立つことの御出来なさる満足な御方と申して善からうと思ふ。而して誠に順善く運ばれて天寿を以て終られたことは明治聖代の目出度い御方と申しても決して差支なからうと思ひます。唯若し彼の御方が出る場所がもう一歩好い位置から出て行つたならば、政治界にもう少し雄飛が出来たであらう。若し薩摩の人であるとか、長州の人であつたならば必ず親方になるのであるが、其処に至らぬのは少し出身地が悪かつた為と云はなければならぬと思ひます。先づ概略其位で私の存じた所を尽した積りでございます。

《塚原周造からの評価》

前島男は一体鋭敏な人で、さうして極めて謹直なる緻密なる人であるが、豪放な所がある。何を以てさういふかと言へば、事に臨んでやらうとする事は百難を排して進んで行く所を以て豪放と云ふ。事に臨んで百折撓まず白刃を履んでも進み行く、是は豪放でなければ出来ませぬ。唯謹直だけには出来ませぬ。それから一旦遣らうとして考へたる事は寝ても起きてもそれをやり遂げない内は承知はしない性質であります。

《前島密肖像写真》

―前島密からのメッセージ―

目的を抱いて居るものは、どんな艱難辛苦も忍ばねばならぬ。丁度玉を抱いて居るものは、これを毀損しまいとして、身を以て護ると同様である。その辛苦に耐えきれぬ者は、玉を毀損し、目的を達し得ぬ失敗者である。人はよく、あれも運これも運だといふが、運は誰の前をも公平に通る、これを捉らへ得ると否とで、大差が出来る。頭を働かして細心注意、よい運を捉えよ。

それから椽の下の力持ちになることを厭うな。人の為によかれと願ふ心を常に持てよ。

（小山まつ子「思ひ出のまゝ」『鴻爪痕』追懐録（財団法人前島会発行、昭和30（1955）年））

◆前島密をたずねて

前島記念館

前島記念館は、新潟県上越市の前島密が誕生した上野家の屋敷跡に建てられています。

昭和5（1930）年当時の前島記念池部郵便局長坂田増五郎と稲田郵便局長川崎真治が前島密の業績を顕彰するために記念館の建設を提唱して募金を募り、昭和6年11月17日に完成しました。

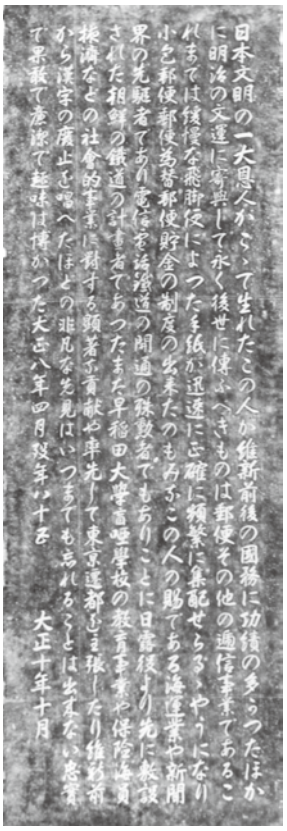
当初は上越三等局長会が運営に当たりましたが、昭和12（1937）年に国に寄贈された後、逓信総合博物館（郵政研究所附属資料館）の分館となり、現在は郵政博物館の分館として公益財団法人通信文化協会が運営し、前島密の遺品類や業績に関連した資料を展示公開しています。

■住所　〒943−0019　新潟県上越市下池部1317−1　■電話　0255−24−5550

《前島記念館》

《生誕記念碑》

坂田増五郎等有志の尽力により大正11（1922）年に建立された。碑銘は渋沢栄一の書。



《背面の碑文》

碑背面の書は阪正臣、選文は市島健吉で、坪内逍遥、会津八一が草案の作成に当たった。

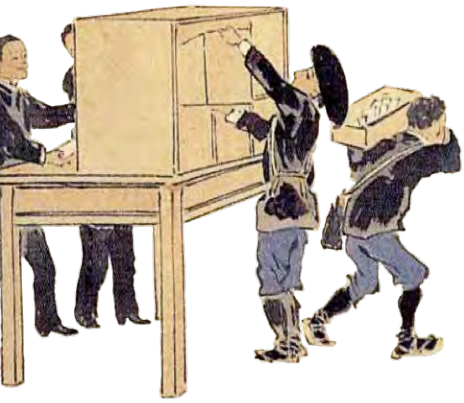
記念碑

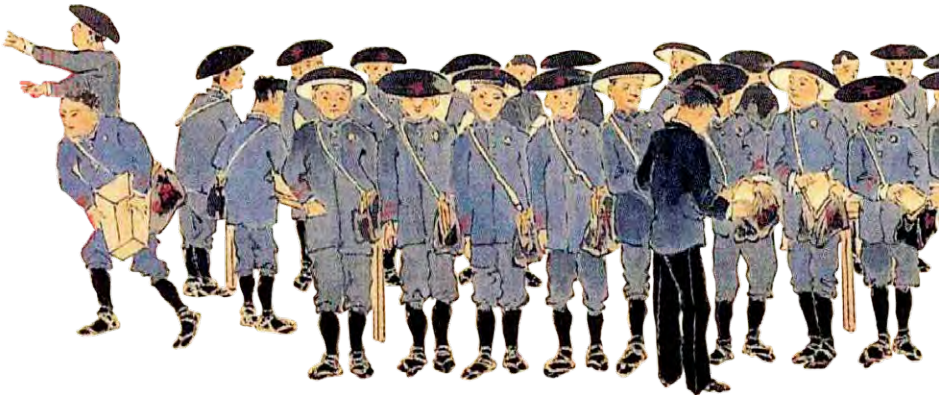
前島記念館の隣には、「男爵前島密君生誕之処」と刻まれた記念碑があります。その碑の裏には、前島密の功績と人柄をたたえる碑文が刻まれています。

「日本文明の一大恩人がここで生まれた。この人が維新前後の国務に功績の多かったほかに明治の文運に寄与して永く後世に伝うべきものは郵便その他の通信事業である。これまでは緩慢な飛脚便によった手紙が迅速に正確に頻繁に集配せられるようになり、小包郵便・郵便為替・郵便貯金の制度の出来たのもみなこの人の賜である。海運業や新聞界の先駆者であり、電信・電話・鉄道の開通の殊勲者でもあり、ことに日露役より先に敷設された朝鮮の鉄道の計画者であった。また、早稲田大学・盲唖学校の教育事業や、保険・海員掖済など社会的事業に対する顕著な貢献や、率先して東京遷都を主張したり、維新前から漢字の廃止を唱えたほどの非凡な先見はいつまでも忘れることは出来ない。忠実で果敢で廉潔で趣味は博かった。大正八年四月　没年八十五　大正十年十月」

― 参考文献 ―

「鴻爪痕　前島密伝」　前島会　昭和30年
逓信協会雑誌「前島密50年祭記念特別号」　逓信協会　昭和44年
「問答集NO.1～NO.3」　郵政省逓信博物館　昭和56年～58年
逓信協会雑誌「前島密生誕150年記念特集号」　逓信協会　昭和60年
「資料図録　前島生誕150年記念特集号」　中村日出男　郵政省逓信博物館　昭和60年
「行き路のしるし」　橋本輝夫　日本郵趣出版　昭和61年
教養の書「前島密」　小田嶽夫　郵政省　昭和61年
「前島密にあてた大久保利通書簡集」　中村日出男　郵政省逓信博物館　昭和61年
人物叢書「前島密」　山口修　吉川弘文館　平成2年
「郵政」（ていぱーく所蔵資料紹介）　郵政研究所附属資料館　郵政省　平成3年～7年
「時代の先駆者 前島密―没後80年に当たって」　橋本輝夫　逓信PRセンター　平成11年
「資料図録第53号　郵便事業の創始者 前島密の人生と業績　前島密一代記」　井上卓朗　逓信総合博物館　平成16年
「資料図録第56号　前島記念館資料集」　井村恵美　逓信総合博物館　平成19年
「前島密ー越後から昇った 文明開化の明星ー」　荒川将　上越市立総合博物館　平成27年
前島密没後100年　前島密故郷との絆講演会資料
「鴻爪痕を読む　前島密　創業の精神と業績」　井上卓朗　平成30年
「前島密＝創業の精神と業績＝」　井上卓朗　株式会社鳴美　平成30年





前島密没後100年記念

鴻爪痕

HISOKA MAEJIMA

会期＝2019年4月19日（金）～6月16日（日）
発行＝郵政博物館　2019年3月29日

［裏表紙図版］《郵便業業絵巻》郵便外務員出発時の点検（部分）久保田米僊／明治26（1893）年
［表紙図版］《郵便取扱の図》（部分）《東京汐留鉄道館蒸汽車待合之図》（部分）前島密の落款印の印面「鴻爪」（部分）前島密肖像写真（部分）
《横浜郵便局開業之図（郵便報知新聞第557号）》歌川広重（三代）／明治8（1875）年（部分）